

擱筆の辭

菲才選ばれて任に當りしより經來りて正に一榮一落洋洋々の氣寒山の眠を歎いて吾人が期ごとに満ちぬ。

昔はエラクリタノ將に河を涉らむとして喟然として曰くわが渡らむとせ
水は已に去れりとあゝ逝くものは涓々滔々寸時もやむ事なし黄昏江畔神來
の興趣に耽りし白頭の古賢襟懷清徹後人をして欽羨泣涕に至らしむ然れど
も逝者の不舍を嘆するもの獨り彼のみならむや龍南の野奔放逸流時潮さか
まき来る所筆を提げて中流に彳みしもの無眼の感懷今や胸腔に溢泄せずば
非す。

過去の十四年より永遠の未來に亘るべき龍南の歴史に於て過去の一年は悠忽として夢の如く渺乎として泡沫にも似たるべし若し事物の意義をして空間上時間上其占有すべき廣袤に比例せしめばこは素より微々として言ふに足らず然れども天下豈此の如き背理を許す所あらむや吾人はこゝに此一年を以て我龍南歴史上最意義あるべき一年なりしを斷じて疑ふ所なからむとす何ぞや我島帝國か空前の活躍に奮進したりし年也我校風の危機な歎し年なり。

五十萬の獅貅一たび満洲の曠野に動いてより花冠燦然として若き此勇者が
頭上五彩爛たり坤輿の萬邦眩目蒼惶讚して後れん事をたゞ恐る此の如き外
形の雄飛は更に促すに内部の堅實と固執とを以てしたり昏々冥々の裡無形
の戈矛を以てしたる奮鬪の勝利は之を得る唯一の手段にして而して眞摯と
献身的熱誠とは爲に要する最急の利器に非ずやしかも現代青年の風潮ひど
くに浮華と輕薄とを求めて此利器を無視し背馳すること日一日に急もしそ
れたちて奮然之に逆航するものなくば社稷の前途や岌々乎として危い哉。
ひるがへりて思ふ我五高か重きを天下になす所以はたゞ其剛毅にして朴訥
眞摯にして熱誠なる棱風にあり今日本が眞人物を得るの希望は殆どに
存じ未來邦國の危急存亡すべてにかかる此棱風の危機何ぞ其意義の重
大なる。

此意義ある一年に於て吾人はたゞ十有四年の光榮ある歴史にみ社會に對す
る仲々の憂心に發しめぐらざる筆をめぐらして以て棱風鼓吹の任に當り邦
國と母校との恩賚に報いで萬一ならむ事を期したりき筆想の乾涸は素より
諸子の叱責に甘ずと雖而も耿々の孤忠盡して惜む所無かりしはひそかに星
斗を仰いて誓言する所也。

微力素より貢獻する所なかりしと雖幸なる哉光明は猶我棱風の一方に存す。

而して後任の諸子其豔美の筆と卓落の氣とを抱いて己にたてり吾人は任み
ち筆を擱くに及び満腔喜悅の感なき能はず。

終にのぞみ吾人の不能をして晏然任に座せしめ玉ひし諸子の宏量に謹謝す。

平井三男

内田虎六

佐々木良綱
大田黒作次郎
高田保馬

明治卅八年三月